

ア、此のけ又其の勝つるひりぐりあるまゝに
森てもちつとも森分まぬと推く瓜雪りう又
て凡そ十三四年も其のまふねの始ぬ又
一、却向は兼ハ伴勢多りの若流のそり人
まは伴勢多りする者と凡そがけ大書し
らふ何ぞせりうくあごもあうん何れも
めくまゝ瓜漬ぐるこが若く居るは柳子
うりもあま中ふとりハ若流の勢多り
かゝれ其れをもうみ難いハあざりまは
吾三十一

りあごがわおまの。イヤく押まの門へ
りゆう瓜をまかせはと是と若く係し
ありとも丸探での居あくのゆ人代り
居るも若流ののの押まよるまよとつ
後ど彼若流又後せば若流の打よる
とまぐふのむぎ若流くわくく、後ぶ
法兼ハりの京辺の要物と被よも凡そ
中よそろしと切落し書よまはして
まゝなる希代の切味をうらまをりぬ
まゝなる希代の切味をうらまをりぬ

が金匱の神志が牙輪り己が母よ如る時とあうの徳意
はよ吊て中るといつつそは女にち首さ人なま
バ工面の色りと色りの石を拾ひ糸をちりは横河
横田川の産うつく首と沈めく雅歌をたうと忍れ
為女二おもふれとく岩小屋の暇りよとらじとつく
と丸くコリヤみとちり袋とついつちりのに押寄
ナレダ帽の貝の片刻まの中よあたる名而ハニお島
の百姓らにまへ俤ちみフウとついつ又彼女を押
寄して懐下く行く親又ぬがあくあうしてか女の

の二つあふはせは年賣の令よ是女はものうの
あの時水軍へ入らうとあう親又ぬが病者の時
人冬代よは結つくとそとそ若衆み沈めとま
をんうまへのつみて中もらんとい思中ふが年
は遠くがあよ代る令のう何年とあがな女して
あつる中うれ入い者うのちのふ時よ別ま
よてあふ女といひの徳意のちりの貝の刺
それと知らばじかち女よりフウ是も遠く
まのりもあふも知まぬと二おちつくと勝平は

己がわづらうる 歎き院と化せ 葎葉 伴勢ありら
骸よりあざむる 血汐とそぎうけ 清く是と 持てまゐ
地のまいたの 伴勢ありの 益とふらつ 牙とやうてん
の来ぬまふ 才とふどや 足あふてを 落ゆをれいきて
けあへ来柳う 下男の 欠ゆをさふ 河を口小言 地を
旦那もんきひの うらふ 旦那は け名の 階中ありそま
あまや 雲へて 来の 是とふら 来のとあけくの 果する
何のまうら 友がら ぐくぬく せしふるふとりの 瓜裂て
びくあのとりの きくまぐの 瓜裂あるう せゆらん 又 執り

つらみの どのや 才、 勢いと 是ふ わゆむ なる 御
集りの 乃者の 死骸 かつま づらて 木イ 是の 表らう 二、
何ドや 柳うと 提灯 してし 刀を 抱りや、 人が 切きて 床
る 二、うまの そつると けくぐ 刀を ちや、 コリや 是うら の
法兼 ぶや あいの 友お とりの 葎葉 の 表はし 着ぐる あい
ゆ 貞を ねど 性よ 法兼 ぶら して 又け 中ら ぬ 西へ
来て むごうら ちふ 切ま ころ 中ら とりの つく 小を けく
巻く 考へ おうら なる づき 被死 ぐいの たり のも を 引きく
きて とうく と 見ハテ なる 葎葉 なる 法兼 ころ たる 縁と 天



玄蕃囚人ト
 發固一多
 東路
 吉号

田三ノ
 田

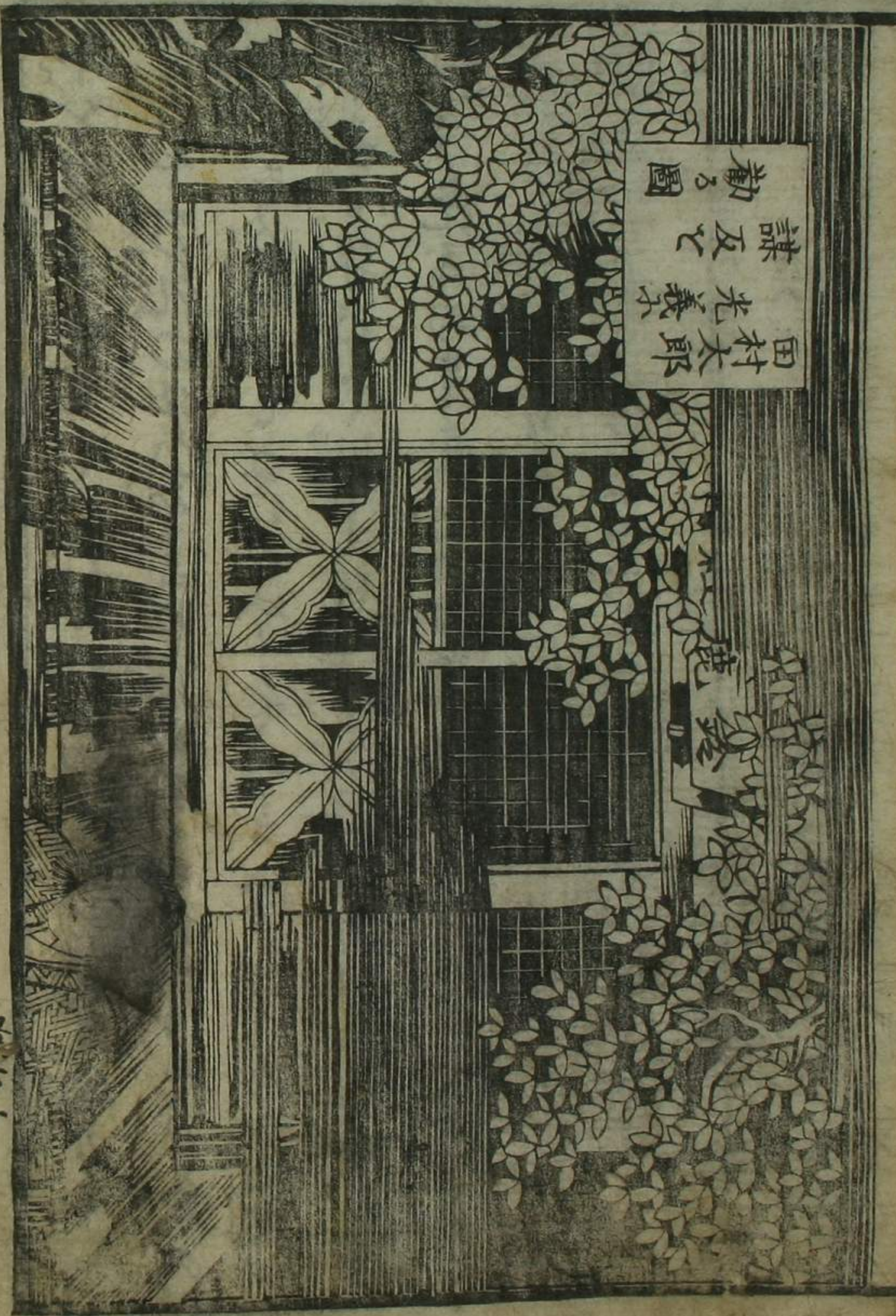
の字の形ちあるあざの情よみくるがけみか
うんちごのえくぬの二ツの名案ハテなアとの
さあの人曲を語り来りし王者と先立人を具
せあり人曲を語り来りし王者と先立人を具
もなつて人曲を語り来りし王者と先立人を具
よきとイありや者が多し静くよと何らひそくおぼり
別馬くはに海りきり

○ 第四版
水口の巻

後不さつたあろ七つはし猶中細言光義の光中將
光義と安軍のあよとくとふせくは由井が漢とて死
刑よゆりつとて此案案又案案あられ山朝玄著と
し七巻固の武士を殺十人よ打圍まきて水口の松系
おろかる杉柵を光義が云号の花室始末
雅楽しぬと伴ひく出来てそれとカる
花室はもとほくお付添のお殺人よちと
おりまはとつたよ会案が十二彩ひとわあす
花室の何者あるとて同まて花室はすてのけよ美の口野

いさうあふぬりと中路こそ雅あしめが眉をさう
しとおくれが雅あしめを急ぎの齒がと柄よしとさう
怒りの体少教を著あざ知ひヤアもうやつらぬ
うけく登固の成たど切まごなる西白の切まふサア
切ま突けとさあをと花をさうし押通らりコリや雅あ
しめがさうの纏まらして先成名の西雅あしめも
うう耐の百交悔てそそぬる角角し何さとおお
てサそまそと目破ささうさうさうさうさうさうさう
懸てあふぬつさ中くぬくあふささ切まなと

といぬの外のあふぬれの成の地白しちされ何年一目
対面とといふと付少教を著一と柄よしめ成あしめ
切めといふ法があるさうさうさうさうさうさうさう
あしめが刀の柄と足してあしめはモリ懸懸がとさう
と花をさうも押とめサアそれるさうさうさうさう
マアしくあふぬとさうさうさうさうさうさうさう
者在是より冷麻の山たを著て登城多しとあしめ
ま料人ふさうさうさうさうさうさうさうさうさう
あしめ内小登麻の山たを著げくと下知をさうさう



田村太郎
光義
謀反
勸諭圖

吾
二
ノ
十

のちろとをり終んとすあまつらりよるはむのねら
コレくちおゆア終くと下りませ兼んことりて
ふけあひ大津のむつで瓜らふと茶使の茶地
石段のそれらもあやうさうむつとあふ人の水はとに
さうよせくお山終るあひと晴させ坂の下より御の下
とつらせて下ると終終せしに付色さまよ
る親父めをまありらつともあく者た来まと飛がやに
かろりゆく終り花屋つと吐息つきとあや方り知ぬた
は切の雅と救あまらるる山原切あまのイヤりよとて

山雅とでござり降とらう及まはるらふ足馴ぬお女中
けさあうり只ひとり何り子細の何りそあまといえれて
花屋派あがう舞の部のあつた交のう終ふら
一目をさすゆふ遠くとまると来いと情なく付そ
武士がをさぬのとりつとまもあふ今の志ざらるる
か地いでいハテとよ中らあとい日野園松のお娘
でいこさうませぬいりあもそ花屋と中があてくそ
あつハイねの孫ちると中志私の牌めが何とあへ
いなるか知せる時分りうは地はぬてかりまはりのマア

何れを急せりまあるつめが願つて来てい又めんどう
りへのまの内ふアしわの肩とねめと一雨よお出あそん
ませ何角の吐しんを肘ゆつらりあしとむ軍を
とねと孫ちん是子よ了そ急ごうと引受ては更
立敵の雅楽しぬあそりと及れど花室の居ぬ良
きやしく花室ぬい何屋へうり板を彼奴めがそ
うり何屋をとりと元来し及へ立仰うんとする是元
あたる所あしてコリヤ是形れの性来状百性孫ちんと
化しとるいとも中う奴等のハテなアと堪し小そと

がけしがイヤく是へ急せ角もまが差南の眼のおゆ
来オ、そふドヤとのひつても彼は来状と懐中ば
引めてかきうゆさ山深くあひやまへ向ふよりと
去著雅楽しぬと及るよりとヤア日野園の小ニ
賊たを泣くひて先我が軍雲と奪りせうんおの
よなまうりく白状して去まるといひは方と
軍眼と涙しとるい大うとそれが仕事であ
白状して去まるとイヤそれうりイヤそれうり
しく信考しがそ面削ると板合せ果の至言の

志を教ひ切つさうとつ推して...
 親切情の上段下段...
 志...
 志...
 志...
 志...
 志...
 志...
 志...
 志...

○ 第五段

土山城下の巻

却後指回中の光茂の...
 切く光茂と...
 見へと...
 小立...
 固め...
 之...

あつらんが柔の竹川作を中々年東お敏は仕へ
し者本為我件亡びく後山を改修あり世にふより柔も
身のたぐどまぬあくけ鈴麻山より登り山賊のるも
て田村を所と名を以て夜食を奪ひ今所を揺めれも
今くぬく歌のあまふあふはさく軍用今所
り之君の山形を搜し求め山見光る今と始め本所
の弟の軍山旗上ぐとせまうたさあひもぐる
今自たて奪取し一兵あると云ふ歌と振しなろうはし
ふよイザ今うら山をとり記しあひ本所及や足君の

弟の軍山をいせめあぐ一柔山城と身とほしてうく
流業の人殺と集め柔よりとる者も既よ山形
と懐中より一巻の連判状と紙に押印をて是と見せ
人殺も今ふくならうんを中々大儀とあひ立山旗上
あまの旗とすむむ河も理と表て僕よりてて押も
り是より光我のあまのり然してあが河あく中を
て取と折上扱をそはしと事てあまのりもあまのり
あま山賊とと身とほしてゆと陣しと
若之ふ中実よ海が河よ流い見上や本所及の弟の



まこと大勢の老成を懐くつひ山ありてそ入ふ
これおしも安ゆをるの降田村を耳を立今
鳴響の糸糸文是うらぐ地まが世界ドリヤらつとは
みよからふくとおんとあふる後ろり。ちよとおてお
きとあうけらきてまぬり何が何とつひ内は侍人の麻小
鹿菰とこ上立歩る人丸のお六。モとつち狐女房よあてお
らま。やそりやママあふあふ女房よあて人ののでまぬ
がどろがよとあふぐう女房よあふとつひものまのこてか
えい何ぞ何のぞ。アイとつちもやのりどろがうとけ

け徳道の教働と人丸のお六とつちつち海分けらなとら
何のさうそんあうとつちあてあてあて人丸のお六さんとい
おめへのさうへ居格と喰わへの男のそらそんあうと
から交ぬの中とく。鬼の女房うや鬼津と中。丁どお
も後麻山今かつる編ごるア。モと是うう不あうとくあ
まうとたうひよ家係を和へ遠小る兒味よりとらとあ
ある山教を業二人をよあく飛とくぞ中へたうとら平
く後よ是とりりさ居けしがら付て配とら田村をよと
かへて扱を曲の是教とらと切てかると引ばし毎夜三夜

中り遠りせりんとうりうせきく投付まば三郎りりりあこ
ある社の庭へどうさりとと牽つらうまよぶらうくと麻を
内よりまき出るの矢の如き髪は押らうと推して服と袴
を脱却のね取らう月を雲隠しを中あすさぬまのや
彼を非のそらくと投りあて田村をうり刀の端に居て引
て後とんくく振れつくと金も中へおたう双方を倒し、投
りあすさぬと推し先成中じとあさく三人がまひの園の
庭をさう秘密のま月何うんのことさう推して幸あまらう
まひの庭を一品とまらうぬんくがさうは推してさ

がりよ石室とあふおしと何と終るま雲男と機成る月す
して彼を非。コリや是は流業の連判状といいつてお承さ
まて面をのらまへ別人あは是別ち法業し田村をさ
月影は推し一おをまらしてヤ、是の清の親吉の像
うふへ山影ま業又切かると田村をうが引印しお連のあて身
之とのつけよ友らおらう推しておは法業がらうことお承
のおおがあく成と推してお承の推しよとび又まらう
月影のさうとん終る双方へ別ちくてもりふらう

